

『はじめての東南アジア政治』

増原綾子・鈴木絢女・片岡樹・宮脇聡史・古屋博子（著）

第7章ウェブコラム

「ファン・ボイ・チャウとホー・チ・ミン」

「ペッサラート，スワンナプーマー，スパーヌウォン兄弟」

発行所 株式会社有斐閣

2018年11月30日 初版第1刷発行

ISBN 978-4-641-15058-4

©2018, Ayako Masuhara, Ayame Suzuki, Tatsuki Kataoka, Satoshi Miyawaki, and Hiroko Furuya, Printed in Japan

ファン・ボイ・チャウとホー・チ・ミン

20世紀初頭、社会ダーウィニズムや国民国家概念など西欧思想が漢文に訳された「新書」がベトナムにも出回り始めていた。植民地化直後の文紳勤王運動の挫折を目の当たりにしたファン・ボイ・チャウは、科挙試験に合格した最後の世代で漢文の知識があり、こうした書物を通じて短期間で近代化を達成し日露戦争で大国ロシアを破った日本に感銘を受け、同文同種の国である日本から武器の援助を得ようと渡航した。しかし日本で梁啓超や犬養毅などから武器よりも人材育成が急務と説かれ、彼らから支援を受けてベトナム人留学生を日本に送る「東遊運動」を開始した。最大時200名のベトナム人を日本に留学させたが、1907年の日仏同盟の協定により、運動は瓦解する。チャウはベトナムで最初の著名文筆家となり「同胞」という言葉を広めるなど大きな影響を与えたが、執筆は漢文のため読者は知識人に限定され、またキン族中心史観でもあった。彼は日本を去った後もタイや中国の広州などでナショナリズム運動を組織した。しかし上海でフランスの官憲に逮捕され、ベトナムのフエに監禁されて生涯を終えた。

ホー・チ・ミンは科挙官僚の父親の転勤について各地を移動、幼少期から「ベトナム」の枠組みを体感していた。父親から漢字を、フランス式小・中学校で公教育を受け、1911年にフランス船の見習いとしてベトナムを離れた。世界各地を放浪した後、パリで共産党に入党し、レーニンの国際共産主義運動を知る。レーニンは、帝国主義の時代において階級闘争は国民国家の枠を超えて世界的に展開されており、資

本主義国の労働運動と植民地従属国の独立運動は連帯して帝国主義に対し戦うべきだと説いた。それまで西欧式教育は受けても白人と同等にはならず、ベルサイユ講和会議にベトナム人の自治と地位改善要求を提出しても黙殺された世界情勢の中で、レーニンの思想とコミンテルン（共産主義インターナショナル）を通じて世界各地に共産党を結成して階級闘争を展開するという発想は、ホーにとっては初めての、そして唯一の植民地従属国の独立に触れた国際的な運動であった。彼はパリからモスクワへ渡り、そして1924年にソ連から派遣され広州へ渡り、そこでファン・ボイ・チャウの運動に従事していたベトナム人青年たちと出会い、1925年にベトナム共産党の前身団体となる「青年」を結成した。奇しくもファン・ボイ・チャウが逮捕されたのはほぼ同時期であり、彼の運動はホー・チ・ミンに引き継がれ結実することになる。

ペッサラート、スワンナプーマー、スパークウオン兄弟

ラオス独立という共通の目標を持ち、ラオスナショナリズムに大きな役割を果たしながらも運命を異にしたのが、ルアンパバーン王国の副王の家系の三兄弟である。長兄ペッサラートはサイゴンとフランスで学び、帰国後植民地官吏となり、1941年にフランスにより首相に任命された。その後のフランスによるラオス刷新運動の推進が追い風となり、ペッサラートが重視していたラオ語文学や歴史の啓蒙は人々の間にラオス・アイデンティティを生み出し、ナショナリズムの下地を築いた。彼の弟であるスワンナプーマーと異母弟スパークウオンは、ハノイとフランスで学び、スワンナプーマーはラオスへ帰国、スパークウオンはベトナムで土木技師として勤務した。三人ともラオス人には珍しい植民地巡礼圏の経験者であった。

1945年にペッサラートはラオスの独立を宣言し、ラオ・イサラ政府を設立した。仏軍復帰以降三人を含むラオ・イサラ政府はタイに亡命したが、1949年のフランスによるラオス王国のフランス連合内での独立承認が、三兄弟の分裂を引き起こす。ペッサラートはバンコク残留を決める。スワンナプーマーは武力による解放は非現実的と考え、これを受け入れて帰国し外交交渉によって完全独立を達成することを主張した。

これに対し、ベトミンとの協力を選んだのがスパークウオンであった。スパークウオンは1945年の日本の敗戦時にベトナムにおり、ホー・チ・ミンからベトミンの支援を取り付けてラオスへ帰国していた。インドシナ共産党は1946年にベトナムゲアン省に東部抵抗委員会を設置し、ハノイでの教育経験があるカイソンらラオス人がベトミンと協力しながらここで軍事組織を編成していた。スパークウオンはここに合流、ネオ・ラオ・イサラ（ラオス自由戦線）を結成する。

一方ラオスに帰国し1951年に首相になったスワンナプーマーはフランスと交渉し、1953年のラオス王国の独立を手に入れた。しかし独立を達成すれば和解できると思っていた彼の見解は外れ、スパークウオンらパテート・ラオは武装闘争の手を緩めなかった。既に東西対立が激化しておりスワンナプーマーは大国の介入を防ぐには中立以外の道はないとして、スパークウオンを連合政府に引き入れた。しかし、第一次、また第二次連合政府も、パテート・ラオの参加に反発する右派により瓦解した。1974年もスワンナプーマーは第三次連合政府の成立に尽力したが、パテート・ラオは軍事的優位を保ち1975年に権力を掌握した。

◎参考文献

白石昌也（2012）『日本をめざしたベトナムの英雄と皇子——ファン・ボイ・チャウとクオン・デ』彩流社。

菊池陽子・鈴木玲子・阿部健一編（2014）『ラオスを知るための 60 章』明石書店。

古田元夫（1995）『ホー・チ・ミン——民族解放とドイモイ』岩波書店。